

地域おこしは自分おこし



落合 亮 (おちあい りょう)

札幌市出身。小樽商科大学を卒業後、2021年5月に鷹栖町地域おこし協力隊に着任。新型コロナウイルスの影響を踏まえた特例で一年任期を延長、現在四年目。

【鷹栖町地域おこし協力隊となったきっかけ】

学生時代の私は学業そっちのけで地域活動に明け暮れていました。卒業後も地域に関わりたくて漠然と考えていましたが、いざ卒業を控えると、自分が何をやりたいのか？どうやってお金を稼いで生きていくのか全く想像できませんでした。そんな時、ネットでたまたま「地域おこし協力隊募集」という文字を見つけました。「協力隊になって社会で活躍できる実力を身に着けよう」とふんわりした想いで協力隊に応募、タイミングや縁に恵まれた地域が鷹栖町でした。提案型の協力隊を募集していたのも鷹栖町を選んだ決め手の一つでした。

「地域経済の活性化」をテーマに地域の稼ぐ力を強化していくことを意識して私は活動しています。地域の稼ぐ力を強化するとは、地域資源を活用した産業を起こすまたは磨く、地域全体の価値の維持、向上、創造に務めることだと私は考えています。私が大切にしているスタンスは「地域に協力するのではなく地域に協力してもらう」ことです。言い換えると「地域と自

分がwin-winとなる目的を設定し、理解と共感をもって地域を巻き込んで活動していく」です。「地域おこし協力隊」というネーミングの印象から、サポート的な立ち回りを求められるかのように感じますが、地域に必要なのはサポーターではなくプレイヤーではないかと考えています。自分をおこして地域をおこす、これが協力隊による理想の地域おこしだと私は考えています。

【活動① 農産物販売PR】

鷹栖町は農業が主幹産業ですが、鷹栖町で採れた農産物は鷹栖町産として売られる機会が少なく、JA〇〇産や北海道産として消費者に届くことが多いです。せっかく鷹栖町で生産されているにも関わらず、鷹栖町産と知らずに消費されるのは勿体ないと感じました。鷹栖町産の付加価値を高める取り組みはできないかと考え、その為にはまず独自の販売体制が必要だと考えました。農家の理解と協力のもと、自分で農産物を仕入れて、大手スーパーへの鷹栖町産野菜コーナーの展開、飲食店や給食施設などに鷹栖町産農産物の卸売を行いました。鷹栖町産のマークやキャッチコピー、PRキャラクターの作成、地元大学生とレシピ開発なども行いました。

「鷹栖町産の野菜が欲しい」という声があっても、1軒の農家では品目が限られる他、繁忙期は営農に忙しく小さな案件に個別に対応できる余裕はなかなかありませんが、鷹栖町産に特化した独自の販売体制を作ることで、一つの窓口で多様な鷹栖町産の品目を集められ、小～大ロットの注文に柔軟に応じることが可能となりました。また、収穫体験など農家の間に入って



鷹栖町産コーナー

調整する機能も果たせ、イベントとも相性が良かったりします。

今年度は、販路と物量を増やし、より安定した収益と鷹栖町産PRの機会を得る為に動いていきたいと考えています。

【活動② 歴史文化を活用した観光まちづくり】

R5年度に観光庁で公募されていた補助金を活用し、モニターツアー2回と観光まちづくりに関するフォーラム1回を行いました。モニターツアーの様子は「オサラッベツアー」とネットで検索すればYouTubeで見ることができるはず（2024年5月時点）。

観光と聞くと、観光が盛んではない地域では「観光業者だけの話」「観光スポットなんてない」といった反応が恐らく返ってきます。観光とは、住んでいる人にとっても、訪れる人にとっても魅力的な地域にしていくための手段の一つだと私は考えています。なので、観光まちづくりとは「うちの町なんもないし…」と思っている住民が多い町こそやりがいいことだと思います。

「歴史文化を活かした活動はできないか？」と思いつつも取っ掛かりを掴めず^{つか}にいた頃、たまたまある町民の方から「町の歴史勉強会するから参加してみない？」と誘われ、参加することにしました。そこで町の歴史に詳しい方や関心のある方たちと出会い、さらに郷土資料館^{しよぞう}に所蔵されている馬具類が国の登録有形民俗文化財に登録されるかもしれないとの話を聞きました。その後、勉強会で出会った町民たちを中心に馬具を始めとした地域の歴史文化をまちづくりに活かす活動を始めました。モニターツアーはそんな町民たちの協力のもと実施したものでした。それなりの規模感のある観光事業への取り組みを通じ、地域への観光ノウハウと経験値の蓄積、反響と話題、機運^{きうん}作りには貢献できたと思えます。

今年度も補助金等を活用していく予定です。モニターではなく、実際にお客さんの受け入れも進めています。収益化と継続化の仕組みの確立に向けて動いていきたいと考えています。



2月モニターツアー

【地域づくりは人づくり】

「地域づくりは人づくり」だと思います。協力隊制度は「人づくり」の手段としても有効だと考えています。任期中はもちろん、任期後も地域と関わり、担う人材の確保育成が期待できます。

協力隊制度を活用する場合、募集の段階から任期後に地域でどのように活躍して欲しいか明確なビジョンを持ち、そこから逆算して任期中の活動内容やマネジメント方針を決め、それに沿った募集案内をすべきだと私は考えています。全国でたびたび話題になるミスマッチの原因の一つに、受け入れ側が自組織の課題や、自組織にマッチするかどうか、任期中に何をさせたいかを軸に募集しているというのがあると考えています。あくまで軸は任期後に地域でどのように活躍して欲しいかであるべきです。任期後、特定の組織の一員として迎えることを見越した採用は良いと思います。地域を担う組織の一員として地域で活躍することですから。また、応募側も任期後どうなりたいか、その為に任期中にどのような活動をすべきか、もっと言えどどのようなサポートや環境が必要かをなるべく明確にしておくべきだと思います。双方が募集応募の段階から任期後の明確なビジョンを共有することがベストマッチ実現の為に重要だと考えています。

「言うは易く行うは難し」です。私自身も冒頭で述べたような不明確なビジョンしか持たぬまま応募しました。協力隊制度は地方の課題、ひいては日本が抱える課題の解決手段となり得る可能性^{あひ}に溢れた制度だと思います。私のこの拙い文章^{つたな}が誰かの参考になれば幸いです。